

自転車をこいで飲み水を つくる汚水浄化器が海を渡る。装置を開発した日本ペーシック(川崎市)社長の勝浦雄一(63)は今年、南アジアのバンラグラデシユで約2カ月半を過ごす予定だ。現地で自転車タクシーの失業者を雇い、彼らの人力でこした水を貧困者に安く提供することを目標とする。「貧困層による貧困層のための水ビジネス」の実現を目指す。

勝浦のプランは国際協力機構(JICA)の支援事業に認定され、最大で今年5000万円の補助が出る。年明け早々、バンラグラデシユの首都ダッカに約2週間滞在した勝浦は地元の水道局や水関連の業者を巡り、街にあふれる自転車タクシーの経営実態を調べた。3月の次回訪問では複

日本ペーシック社長

勝浦雄一さん



自転車こいで飲み水に

かつら・ゆういち 富城 県生まれ。1971年慶大法 卒、三菱レイヨンに入社。広報課長、クリンスイ部長などを経て退職し、2005年に浄水装置製造の日本ペーシックを設立した。 の販売実績がある。 従来も台風に見舞われた途上国に製品を送るなど支援活動を手がけたが、バンラグラデシユでは現地企業と組んで本格展開を目指す。 事業モデルはこうだ。1時

数の水源地を回り、水質を飲ませたいと独立を決意。間に約3000リットルの水がこせろをシクロクリンを現地の協力工場を組み立て、失業 中の自転車タクシー運転手 を雇って川や池の近くでベ ーシッククリン(55万 ガルをこがせる。できた水 はその場で安く販売する。 価格は1リットルあたり円換算

貧困救う浄化事業に挑戦

で1内程度とし、主に貧民 街を巡回する。洗面器やバ ケツなどに繋がり売りする方 式を考えている。2年目で 100台、3年目で300 台の稼働を目指す。「将来 は周辺のチャンマーやイン ドなどにも事業を広げたい」と勝浦は話す。 国内でも昨春の東日本大 震災以降、災害用の浄水器 への関心が高まっている。 同社には横浜市の学校法人 や東京都公園協会などから 自転車一体型の納入依頼が 相次いだ。普段は家庭用の 浄水器で、災害時には手動 ポンプで風呂水などを浄化 できる小型器(5万700 0円)にも注文が来る。 「被災地や途上国への支 援を通じて少しでも子供た ちの命を守れたら」。そう 話す勝浦の表情は力強さに あふれていた。 敬称略